子供は滿三歳で一通り言葉を覺える

牛島義友

子供は滿三歳で日本語を覺えてしまふと言つたら隨分突飛な意見だと思はれるかもしれない、私自身もまさか斯んな結論が現れやうとは考へて居なかつたが、實際に研究調査してみた結果、子供は滿三歳で言葉の發達は一つの頂點に達すると言はなければならない。

子供が初めて言葉を發するのは十ヶ月目頃からで、最初のお誕生日頃はまだウマ〳〵、ワン〳〵と二つか三つ位しかしやべらない、それが急激に發達し小學校入學の時には四千から五千位の語彙を持つ樣になると從來言はれて居た。併し此急激に發達する間の狀態は餘り明らかにされて居らず、大體年齡と共に進步し、二歳よりは三歳、三歳よりは四歳と言語生活は豐富になり、複雜になると考へられて居た。

此比較的忘れられて居た時期に就いて私達は研究を試みた。此時代の言葉は全部話し言葉で、子供がしやべつたものを材料にして研究せねばならず、年長兒の如く讀んだり書いたりする言葉でないだけに研究は困難になる。私達は子供が自由遊びをしてる時に勝手にしやべり出した言葉を採錄し、それを資料にして研究した。卽ち三十分間に子供の話した言葉を全部、發音其儘に記錄する事とし、滿一歳から滿六歳までの子供、延人數二百八十八人分の資料を得た、之は東京だけではなく全國に亙り、農村の子供も含まれて居る。

此子供達の話した言葉を其文章の構造や語彙の現れ方等から整理して行つた、先づ三十分間に話した文の數からみよう。

文の數　文章の數と言ふと語弊があるが、と言ふのは子供の言葉には文章になつてないものが澤山あり、「おや犬」と言つて犬がやつて來たのをつげる事などがよくある。斯るものも一つの文と假に數へて、三十分間の平均の文の數

をしらべると次の如くなり、滿一歳兒は平均六一・三で二歳、三歳となるに從ひ增加して居る、併し三歳以後は增加せず大體同樣の狀態に止まつて居る。

女の子はおしやべりだと言はれて居るが、此調査からは一概にさうとも言へない、一、二歳頃は女の方がよく話す樣であるが、其後は女の方が少ないのも現れてをる。

文の長さ　前のは一つ一つの事柄や觀念を現した文の數をみたのであるが、此文には長いものも短いものもある。智能が發達するに從つて長い表現をする樣になると考へられるが、此點は如何になつて居るであらうか、此文の長さをみるために、文の中の語數を數へてみた。例へば「犬が來た」は「犬―が―來―た」と四語に數へられるが、斯る計算をした結果は第二表の如くなり、一歳兒の文は殆ど一語位で、普通一語文の時代と言はれてをる。卽ち子供が「ワン〳〵」と言ふ一語で、「犬が來たよ」「犬にビスケットをあげよう」等の色々な意味を持たせる時代であるが、三歳頃になると四語文位になり、文章の形をとゝのへて來る。其後は益々長い、複雜な文章の形で

文の數

	男	女	計
一歳兒	44	66.2	61.3
二歳兒	70	79.4	78.2
三歳兒	100.2	92.0	96.4
四歳兒	99.6	80.1	86.1
五歳兒	81.3	102.7	91.1
六歳兒	85.8	64.3	79.4

話すかと言ふに必ずしもさうなつてゐない。

其他文章の構造を調べて、副文章のついた文章の數、例へば「犬が來たからあつちへ行かう」の樣な複雜な文章の現れる狀態をみても、一歳臺には一つもないが、二歳、三歳と增し、三歳以後は大した增加を示して居ない。

動詞の活用形　次に文章の長さや性質ばかりでなく、其中の一つ一つの語を考へてみよう。例へば動詞の活用形が如何に使はれて居るであらうか。動詞「來る」について見ても色々な活用形がある譯で、未然、連用、終止、條件、命令の活用形がある上に、複語尾がついて種々な形をとつて來る。例へば未然形は「こられる、こさせる、こぬ、こない、こよう」となり、連用形は「きたい、きた、きて」の他に「きてみる、きてちようだい」等と他の用語につらなつて複雜な形を示す。斯る種々の活用をやつてのける事は隨分面倒な事と思ふ、吾々が外國語を習つて一番六ケ敷く感じるのは動詞の活用形である、過去、過去分詞とか、人稱複數による相違を正確に使ひ分けるのは並大抵の事ではない。

文の長さ

	男	女	計
一歳兒	1.136	1.395	1.366
二歳兒	3.114	2.767	2.811
三歳兒	4.032	4.894	4.427
四歳兒	3.977	4.768	4.508
五歳兒	4.646	5.468	5.007
六歳兒	4.648	4.579	4.628

此複雜な操作を子供はちやんとやつて居るであらうか。「來る」と言ふ言葉だけは言へるが、其活用は出來てないのではないかと考へられるかもしれない。併し調査の結果は此點もちやんと滿三歳位で出來てをる。

「來る、やる、見る、取る、なる、食べる、作る、持つ、乘る、寢る、泣く」の動詞について其活用形を年齢別に調べたのは次の表である。此數字は面倒な計算から出されたものであるが、年齢的發達の狀態だけを讀み取つていたゞき度い。滿一歳兒には斯る活用形は殆ど現れて居らず、連用形がほんの少し使はれてる位である。二歳兒になると少し現れ、三歳兒には急に增加して居る、其後は增加してるものもあり、餘り變らないものがある。之は未然、連用と纏めた表であるが、更に複語尾のついた活用をしらべてみても、殆ど總ての活用形が滿三歳になると現れて居り、而も五、六歳兒と變らぬ割合で使用されて居る。

	未然形	連用形	終止形	條件形	命令形
一歳兒	0	0.36	0	0	0
二歳兒	0.56	4.44	1.46	0	0.04
三歳兒	3.09	9.25	2.74	0.04	0.23
四歳兒	2.12	8.34	2.25	0.04	0.26
五歳兒	3.19	10.1	2.43	0.24	0.43
六歳兒	2.62	6.52	2.81	0	0.14

てにをはの使用　次に助詞について調べても同樣の事が言へる。外國人が日本語を話して、一番耳觸りになるのは「てにをは」が落ちたり、誤る事である。語法の異る彼等には助詞を使ひ分ける事が非常に困難らしい。助詞は字にしては極單純なものであり、文章の中でも重要な位置を占める譯ではない。併し文章の正確な表現や、氣情や氣分を言ひ現すには助詞は最も大切な役割を占める。正しい日本語を驅使するには助詞を自由に正しく使へなければならない。小さな子供の話す言葉には「ワンワンあつち」式で助詞が缺けてるが、何歳位になると助詞が使ひこなせる樣になるであらうか。子供の最も多く使用する助詞は「の」で、それに續き「よ、ね、に、が、は、て、と、も、わ、(わよ)、から、か、な、のね(のよ)、へ、を、や、かな(かい)、だけど(けど)等」であるが、此中主要なもの若干について、其年齢的使用狀態を表示すると上の如くなる。此表を見ても、滿一歳兒は殆ど助詞を使ひ得ないが、二歳兒には少し現れ、三歳兒は急に增加してをり、而も其

	助詞				
	の	よ	ね	に	から
一歳兒	0	2.0	0.3	0	0
二歳兒	7.6	7.0	4.2	2.8	0.9
三歳兒	12.0	8.4	8.0	6.7	3.3
四歳兒	16.1	7.6	7.3	6.4	2.1
五歳兒	16.7	8.5	10.5	8.2	3.2
六歳兒	20.0	8.8	6.0	6.7	1.5

後は餘り變化がない。卽ち固定な助詞の使用も滿三歲になると一通り出來る樣になり、色々な助詞を使ひ分けて居る。何十年も日本に居る西洋人がまごついてをるてにをはを、わずか三ヶ年の自然の學習の中に子供はマスターしてしまつて居る。

マスターしたと言ふと或は言ひ過ぎかもしれない、色々な助詞は使つてみても、はたして正しい、適切な助詞を使つたか否かは、此表からは判らない。併し子供の話しを調べた印象からは餘り誤つた使用はなかつた樣に思ふ、一々統計は取れなかつたが、概して誤は少かつた。

片言　以上の樣に言葉は豫想外に早く習得されて居るが、最後に子供の言葉に特有な片言、發音の不充分なもの、例へば、「ぬれた」を「にゆえた」と言ひ「あら〳〵」を「あやあや」と言ふ類のものは之は三歲で完成するとは言へない。今三十分間に二語だけ不完全な發音をなすとして、統計してみると次表の如くなる。卽ち誤りが二話以下ですんで居るものゝ百分率は二歲兒では未だ一つもなく、三歲兒でも尙二七・五%に過ぎず、五歲兒で大體九〇%以上になる。故に發音が一應出來上るのは少くも滿五歲にならねばならない、此點は今までの言語發達三歲說に當嵌まらない。

併し以上の諸種の點から考察して子供の語論が大體滿三歲で一應出來上ると言つても大過なからう。

發育の完成

	男	女	計
二歲兒	0	0	0
三歲兒	26.7	28.6	27.5
四歲兒	75.0	38.0	50.0
五歲兒	91.6	100	95.5
六歲兒	80.0	100	85.0

斯る結論は全く常識を根本から覆すものではあるが、今先入見のない公平な態度で滿三歲位の子供のしやべつてるのを聞いてごらんなさい。如何にも其內容は幼稚な、吹き出し度い樣な事を言つて居るが、併し其言ひ方、言語の形式は案外にこゝのつて居る事を氣付くであらうし、又何よりも彼等がおしやべりである事を氣付くであらう。大きくなると無口になるであらう子供でも、彼の頃は實によくしやべつて居る、つまらぬ事、何でもない事を話題とし、何度も何度も同じ事を繰返して言つてをるのに氣付くであらう。前の研究結果の數字は誤りでなく、尤もだと納得出來るであらう。

滿三歲と言へば普通まだ幼稚園にも行つてない時期である。此家庭の中で自然に習ひ覺える時代に言語發達の一つの頂點に達するとすれば、家庭での言語教育の重要性を痛感させられる。放任された家庭では誤つた發音や語法のまま子供は正しいと思つて覺え込むであらう。誤つた使ひ方を後から匡正するのは非常な努力を要する。

併しだからと言つて子供の誤つた言葉を片端から訂正し

て行く樣な態度では子供はいぢけてしまふし、又切角お母さんにお話しようと思つてる時に言葉尻をとがめられたのではいくら子供でもいやになつてしまふ。親と子供の親密な心の交流を害する事なしに言語教育をなすにはどうしたらよいか。

子供は旺盛な知識慾と記憶力で色々なものゝ名前を知りたがる故に力めて親切に正確に教へてやるとよい、三歳位になると一度聞いただけでもよく憶える。子供の發音の誤つたのは五歳頃までには正しく直る樣に除々に改めてやる。併し別に誤つてる譯ではない子供特有の言葉、例へば犬をワン〳〵と言ひ舟をギッコンコと言ふ類のものは別に止めさせる必要はない、犬にワン〳〵とイヌの二つの言葉がある事を覺えるのも子供の能力からみれば大した負擔ではなく、其内にはケンもドッグも覺えねばならない。子供の言葉は相當尊重し大人も子供にはワン〳〵と言つてやり、其時には幼時を思ひ出して、無心な氣持で子供と遊んでやるがよい。

併し大人同志が話す時、或は年長の子供に話す時には完全な標準日本語を使はねばならない。さうすれば傍で聞いてる幼兒は自然にそれをまねて正しい言葉を用ふる樣になるであらう。

過ぐる三月二十五日、東京女高師の講堂――微音堂では、東京女子高等師範學校文科、理科、家事科、體育科の他、保育實習科、附屬高等女學校及び專攻科の卒業式が並び行はれた。この式での校長下村壽一先生の告辭は、その音聲と言ひ態度と云ひ殊に文詞と云ひ、たゞ立派の一語に盡きるもので、新卒業生には勿論、こゝに列席せられた凡ての人に深い感激を與へるのが常である。今年の告辭も亦然りで、式を終へて會場を出て來た者、皆、異口同音に、今日の告辭のお立派さを讃へたのであつた。次は、告辭の中の、保育實習生に與へられた一節である。

――保育實習科の卒業生諸子　諸子の在學期間は短かりしと雖黽勉勵精略〻幼兒保育の理論と實際とを修得せられたのであります　幼兒は家の寶であり國の寶であります此の寶を愛護して幼兒心身の適正なる發達を遂げしむることは教育の他の如何なる部門に比べても決して輕いものではありません　況や人的資源涵養の急今日より甚だしきはなき時世に當り職を幼稚園に奉ずると否とを問はず常に幼兒保育の行者を以て自ら任じ保育報國の道を實踐し時代の要望に對應して苟も遺憾なきを期せられることを望みます――

（記者）